

令和5年度松山東高校通信制入学式式辞

本日、春の陽光が降り注ぐ、この佳き日に、多数の御来賓の皆様の御臨席を賜り、多くの保護者の皆様の御出席の下、令和5年度愛媛県立松山東高等学校通信制課程の入学式及び開講式並びにNHK学園高等学校の入学式を挙行できますことは、本校にとって、大きな喜びでございます。

ただ今、入学を許可いたしました新入生の皆さん、御入学、おめでとうございます。皆さんを本校の生徒としてお迎えしたことを、心からうれしく思います。

皆さんの入学に当たって、本校の卒業生である、大江健三郎さんの話をいたします。大江さんは、ノーベル文学賞を受賞された作家で、今年、88歳でお亡くなりになりました。その名前を知っている人も多いと思います。大江さんは、その著書『「自分の木」の下で』の中で、御自身のお子さん、光さんの学校生活を通して考えたことを述べておられます。

それは、子どもが学校に行く理由について、です。光さんは、現在、作曲家として活躍しておられますが、生まれたときに頭の部分に異常があって、4、5歳になっても言葉が話せなかった、そして、音の高さや、その音色にとっても敏感な子どもだったそうです。7歳のときに、一年遅れて、今の「特別支援学級」に入った、と本には書かれています。

大江さんが教室をのぞいてみると、そこでは、光さんがいつも耳を両手でふさいで、体を硬くしていた、しばらくたつと、自分と同じように、大きい音や騒音が嫌いな友達を見つけ、二人でいつも、教室の隅で手を握り合ってじっと耐えている、でも、そのうち、光さんは、その友達がトイレに行く手助けをするようになりました。自分が友達のために役に立っている、ということは、光さんにとって、新鮮な喜びだったそうです。もちろん、その友達も、光さんに支えになっていたことと思います。そして、二人は、いすを並べて、音楽を聴くようになる、その後、光さんは、音楽に関わっていくことになるのですが、大江さんは、この、光さんの生活について、このように書いておられます。

「いま、光にとって、音楽が、自分の心の中にある深く豊かなものを確かめ、他の人に伝え、そして、自分が社会につながっていくための、いちばん役に立つ言葉です。それは、家庭の生活で芽生えたものでしたが、学校へ行って確かなものとなりました。」

繰り返しますが、光さんにとって、「自分の心の中にある深く豊かなものを確かめる言葉、そしてそれを他の人に伝え、社会につながっていくための、最も役に立つ言葉」、それは、音楽だった、そして、そのことは、学校で確かなものになったのです。

大江さんは、続けます。「国語だけじゃなく、理科も算数も、体操も音楽も、自分をしっかり理解し、他の人たちとつながってゆくための言葉です。」「そのことを習うために、いつの世の中でも、子供は学校へ行くのだ、と私は思います。」こう述べておられます。

皆さんも、この松山東高校通信制での学び、そして、本校でのかけがえのない出会いと経験を通して、自分をしっかり理解するためのもの、他の人たちとつながるためのものを見つけ、社会に羽ばたいていってほしい、そう願っています。これが、皆さんへの、一つ目のお願いです。

二つ目のお願いは、豊かな人間性を身に付けてほしい、身の回りにいる人やお互いを慮る心を育ててほしいということです。配慮の「慮」と書いて、「慮る」と読むのですが、それは、思いやりの心や感謝の気持ちを持つ、ということです。人と意見が食い違うとき、その意見を排除するのではなく、人を慮りながら、皆が納得できる答えを一生懸命見つけてほしい、その努力を通して、豊かな人間性を持った、優しい、信頼される人間になるのだと思います。

保護者の皆様、お子様の御入学、おめでとうございます。心からお喜び申し上げます。私たち教職員一同は、本日からお子様をお預かりし、先ほど述べた二つのお願い、自分をしっかり理解し、他の人たちとつながるものを身に付け、社会へと羽ばたいていけるよう、また、他者を慮る豊かな人間性を身に付けられるよう、精一杯、努めてまいります。本校の教育活動に対しまして、御理解と御支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

新入生の皆さん、皆さん一人一人が、新しい友人、よい仲間や先生方との出会いに恵まれ、豊かに成長されることを期待して、式辞といたします。

令和5年4月16日

愛媛県立松山東高等学校長 沖田浩史